

令和元年度 第1回総合教育会議議事概要

令和元年6月5日(水)に令和元年度 第1回総合教育会議が開催され、「教育のまちふくちやまのさらなる発展」をテーマに意見交換が行われました。

第1回総合教育会議の議事概要は別添のとおりです。

令和元年度 第1回総合教育会議 議事概要

日時: 令和元年6月5日(水)
午前10時00分～11時30分
場所: ハピネスふくちやま会議室2

■出席者(敬称略)

教育長 端野 学
教育委員 倉橋 徳彦、塩見 佳扶子、和田 大顕、大槻 豊子
市長 大橋 一夫
事務局
市長公室理事、経営戦略課長

■開会 市長挨拶

- ・昨年度の総合教育会議では、社会が大きく様変わりする中で、ICT分野を中心に、「子ども自身が生き抜く力の育成」をテーマに、プログラミング教育の導入など先進的な取組について意見交換をさせていただいた。令和という新しい時代がはじまり、日本社会がかつてないスピードで大きな変化を迎えていくことを多くの方が予感しているところと思う。
- ・今回の総合教育会議では「教育のまち福知山のさらなる発展について」と題し、こうした変わりゆく時代に子どもたちが将来を切り拓く力を身に付けてもらうために、福知山の教育をどのように発展させていくべきかについて、意見交換を図りたい。
- ・1点目には、大きな時代変化に適応できる地域人材の育成という観点から、北近畿における「知の拠点」と位置づけている福知山公立大学の機能、人材、ノウハウを活用した小、中学校教育との連携の可能性について意見交換させていただく。
- ・2点目には、現在、世界的に取組みが進められており、本市でも環境分野を中心に様々な施策展開を計画しているSDGsを観点として、今後重視される「持続可能な社会の創り手」を育成するための教育活動であり、教育分野においてSDGs達成の鍵となる「ESD」の理念について、思いをお話させていただく。
- ・この会議を通して本市教育の振興が図られますことを期待し、開会の挨拶とする。

■議事

意見交流 テーマ「子どもたちが未来を切り拓く力の育成について」

○第一テーマ: 市立小・中学校と福知山公立大学の連携について

大橋市長

- ・福知山市は初等教育から高等教育までの各種学校が設置されており、同規模の地方都市の中では非常に教育環境に恵まれた自治体の1つと言える。
- ・こうした環境の中で、先人の皆様は教育のまち福知山として様々な施策を展開されてき

た。今後のさらなる発展のため、福知山公立大学と市立小、中学校との連携についてお話をさせていただき、委員の皆様と意見交換を図りたい。

- ・現在の教育委員会においても、教育のまち福知山として様々な施策、事業を展開いただいているところだが、いよいよ令和という新しい時代がはじまり、昨年度からプログラミング教育を題材としてお話させて頂いている通り、今後の社会、経済の状況が大きく変化をしていく中で、教育をどのように発展させていくべきかという課題がある。
- ・福知山公立大学では、単に地域に大学があるというだけのことではなく、地域実践教育として地域に直接出向き、地域で活躍できる人材を養成している。
- ・今の子どもたちにとっても、将来大きくなってから地域の中で活躍できる人材になってほしいと考えており、義務教育の段階からどのように地域と関わるかという点で、大学と同様に地域と連携した体験的な関わりを含んだ取組みが重要である。
- ・一方で、福知山公立大学では来年度より情報学部の新設を予定しており、現在文部科学省に設置認可申請しているところである。最近の状況ではAI、IoT、ICTなどのシステム教育の話題が多くでてきており、専門的な勉強を行うということではないが、義務教育の段階から、そういった分野に親しむことが大切であるといわれてきている。
- ・こうした教育は、文系、理系に関係なく、子どもの頃から親しむことが必要と考えている。
- ・今後の社会ではデジタル人材の初任給は2割り増しとなり、一方で現在の日本のAI先端技術に関わる人材は世界中の中で4%弱しかおらず、このままでは世界についていけなくなる、といった報道もある。
- ・これは教育というよりも経済的な見方ではあるが、現実的に大きく社会、経済が変わっていくという状況がある中で、小中学校と大学の連携の中から新しい時代に即した教育が生まれてくることが望ましいと考えている。
- ・福知山公立大学は世界を視野に活躍する人材を育成することを使命の1つとしており、また一方で、地域に開かれた大学としてあり続けていかなければならない。
- ・地域経営学部のこれまでの実践の中から、小中学校の地域的な教育の場に取り入れられる部分もある。そして現在設置に取り組んでいる情報学部も、先端教育の分野で義務教育との連携が図れる。
- ・大学との連携を進めていくことによって、教育のまち福知山の発展が見えてくる部分もあろうかと思う。
- ・ここまで概略についてお話してきたが、大学政策課より具体的な取組みの内容をお話させていただこうと思う。

大学政策課長

- ・2020年より、長らく日本のAI研究で草分けとして活躍されてきた西田豊明先生に情報学部長として赴任いただく予定である。

- ・日本国内では東京大学、京都大学をはじめ、研究室内で世界最先端の研究が行われている中、この福知山においては研究室での研究だけではなく、地方部での情報学に何ができるか突き詰めたという事から、西田先生をはじめ、これに賛同いただける多くの教員の皆様に、来年4月より赴任いただく予定となっている。
- ・情報機器を使って地域を豊かにする学問・研究・教育を担っていきたい。また、西田先生による、福知山市内の中学生向けの出前授業を予定している。
- ・合わせて2018年の活動報告であるが、新町商店街の空き店舗を借り上げ、まちかどキャンパス「吹風舎」として、地域の子どもたちや住民の方々と新町商店街を元気にする取組を1年間行ってきた。
- ・福知山公立大学に求められている機能として、平成29年度に策定した「知の拠点整備構想」の中で、大学の振興と、大学を活かしたまちづくりのためのグランドビジョンというものがある。
- ・その中で、大学と北近畿の各種団体との連携を促進するとともに、地域に対する誇りと愛着を醸成するための施策の展開が必要であり、4つの拠点機能を大学に整備している。
- ・4つの拠点機能の中で最も大切なものとして、人材が循環するような拠点となる事としており、とりわけ小・中・高・大の連携を強化し、地域を愛し、地域のために働きたいと思える人材育成を進めていかなければならないと計画に位置づけている。
- ・こうした中で、先ほども紹介したように、市内の4つの中学校で、西田先生の出前講義を予定している。また、昨年より議論いただいているプログラミング教育についても、情報学部の教員が赴任した際には、様々な相談や連携ができればと考えている。
- ・大学としても、プログラミング教育を始め、小中学生向けに子どもたちにコンピュータを教えることは非常に良い教育機会であり、ぜひ大学としても学生が子どもたちと触れ合える機会を頂戴したいと、西田先生よりメッセージを頂いている。
- ・その他にも、既に予算化頂いている地域未来塾や、探究学習として「A to Z」という地域冊子を夜久野中学校、三和中学校で作成しており、今後大江中学校でも作成するといった取組を予定している。
- ・このように、既に様々な内容で連携いただいているところであるが、改めて本市としても「知の拠点整備構想」の趣旨に沿って、連携を進めていきたい。
- ・ここで、公立大学の井口学長からの提案をご紹介します。
- ・1点目として、小中学校教員と大学教員の交流を通じた「教育力」の向上である。
- ・新たな教育分野への展開と高度化は、初等教育、高等教育を問わず求められているものである。
- ・公立大学としては、英語、システム分野での専門化が揃いつつある状況である。一方で、大学教員は専門知識を持っているが、指導、教育力、地域理解においては小中学校の先生方に及ぶものではない。福知山には幼稚園から大学まで揃っているという利点を最

大限活かし、お互いの強みの分野で授業の相互派遣、合同研修など、教員の交流を通じた教育力向上を検討したい。

- ・2点目は、幼少期から子どもたちが大学を身近に感じることである。福知山を含む北近畿において、大学進学を志す方は地域を出るということが当然の状況であったが、この北近畿で質の高い高等教育を提供することが福知山公立大学の使命のひとつであり、全国から学生が集まって様々な活動を行っている学生の学びの姿勢や意欲が、福知山の子どもたちにとって一つのロールモデルとなるのではと考えている。子どもたちに、大学の教員、大学施設などにふれていただくことが、キャリア意識の涵養に有効であり、先ほど紹介した取組みのほかにも、出前講座や図書館開放、見学受け入れなど、積極的に対応していきたい。幼少期から大学を身近に感じることを通じて、地域の人材育成につなげたい。

・大学としても、大学の振興というだけでなく、市のまちづくり、人材育成について思い入れを持っているところである。多忙を極める小中学校の教育現場の状況であるので、単に新たなものを積み上げるのではなく、大学教員、小中学校教員のそれぞれの強みを活かし、お互い補完しあいながら子どもたちに向けた取組が行えることが大事である。これから共に意見を出し合える機会を継続できればと思っている。

- ・以上、井口学長からの提案事項を紹介した。今後、ご検討いただければと思う。

大橋市長

・福知山公立大学では地域と密着した学びの拠点になるとともに、来年度からは最先端技術を活用して地域を豊かにしていく取組みをしていきたいと考えている。

・次の社会で活躍する人材の育成を目指し、子どもたちにこれからの時代を生きていく力を養っていく面から、大学の活用を積極的にしていければと思っている。

- ・その上で、公立大学積極的な活用について、委員の皆様からのご意見を伺いたい。

和田委員

・昨年の総合教育会議においてはプログラミング教育、防災教育の話題で意見を述べさせて頂いた。そのいずれもが、ただちに子どもたちの教育活動へ反映されたことはうれしいことである。まずもって感謝を申し上げたい。

・成果はまだ表れているものではないが、プログラミング教育が1年終わり、通常の教育活動では消極的な児童が、プログラミング教育を通して積極的に関わっている態度が表れてきたと先生から聞いており、非常に喜んでる。

・学校教育が充実するほど、また学力が高い自治体ほど、人口の増加傾向があるとのデータがある。学校教育の充実は、住居先を選択する大きな要素として位置づけられると読むことができる。

- ・学校教育では知・徳・体のバランスのとれた子どもたちの育成を目指しているが、これ

からの社会、地域に必要な資質、能力をふまえながら、地域の住民が希望する子どもの学力向上に視点を当てた教育行政の展開がこれから必要と考える。

- ・人、物、知恵を備えた大学教育を保育園、幼稚園、義務教育、高校、市民の生涯学習にまでつなげるという考えには、おおいに賛同する。
- ・昨年、幼稚園が子ども政策室に機構変更され、保育園と幼稚園がつながり、学習内容で幼稚園と義務教育学校がつながった。義務教育学校と高等学校は、学力面、生活指導面でつながり、そこに大学が加わることで教育環境の体系ができたと思う。
- ・しかしながら、教育環境の体系と教育内容の系統化は表裏一体であるものの少し違う。教育内容については鋭意、各園、学校で取組んでいるが、それぞれの統一性、系統性には課題があり、より連携を深めなければならないと考えている。
- ・市長部局と教育委員会が考える教育のまち福知山の未来の姿を双方共通理解できているであろう、というところから考えが出発しているのではないかと思うが、私は若干の差異を感じている。
- ・再度、教育のまちの姿を双方が確認し合って、教育課題の共有、分担をしながら、校種の接続、学校の学びの連続性を、連携の形や手法と並行して考えていく必要があると考える。
- ・福知山公立大学の目指す大学像の中で「知の拠点」とあったが、大学の先生方がまちづくりの様々なプログラムの委員として意見を頂いたり、学生には教育ボランティア、地域活性化ボランティアとして力を頂き、ありがたい取組みであると感謝している。
- ・これから始まる小学校での英語活動のサポート、大学と小中学校教員の交換授業、ボランティア、インターンシップ受入れなど様々な取組があるが、大学像のひとつの中に、地域と世界をつなぐグローバル研究実践拠点というものがあり、これが面白いと思う。大学を通して、義務教育の子どもたちが世界を見るということができないかと思う。
- ・大学が考える連携と、義務教育現場が考える連携は思いが違う部分もあるので、すり合わせをしていければと思う。
- ・連携の取組みがイベントで終わってしまうことのないようにしたい。子どもたちの視点ばかり考えて、協力していただく側のメリット、インセンティブ、モチベーションの維持、やって良かったと感じられないといったことにならないよう、WIN-WINの関係になることが重要。
- ・連携はやっていくべきであり、組織連携を推進するのは大学政策課だと思うが、校種間の教育内容、教育方法連携担当者は必要であり、推進役が大切である。
- ・現行の取組みは報道などで、市民に広く細かく丁寧に広報していただくと共に、教育のまち福知山の再構築に向けて、再度認識の確認と、現場意見の聴取も合わせてお願いしたい。

塩見委員

- ・今日のテーマを見せて頂き、教育のまちふくちやまを題材として出していただいたことが、本当にうれしかった。
- ・昔は教育のまち福知山の看板が駅前にあり、先輩方からは、電車でここを通る人はここを「教育のまち福知山なのか」と見ながら通られると教えていただき、その素晴らしい先輩方の背中を追いながら、当時の教育に携わってきた。
- ・当時の中丹は、京都府の教育をリードし、福知山はその中丹をリードしている位置にあるとの自負があった。その自負のもと、教育のまち福知山をコンセプトに頑張ってきた。
- ・近年、この言葉が下火になってきており、今の若者は知っているのかな、と思っていた。その中で、この言葉を出して頂いたことがとてもうれしかった。
- ・その教育のまちふくちやまを質的に高めるためにその一端を公立大学が担うということについて考えをお話する。
- ・これより新しい学習指導要領に改訂されるが、その理念は社会に開かれた教育課程である。地域の人的、物的資源を活用したり、土曜や放課後を活用したりして、学校教育を学校内に閉じず、その目指すところを社会と共有、連携して実現していこうということになっている。
- ・学校教育は健やかな子どもの育成を目指し、教育を作り出す。地域家庭はその教育を支援していくので、大学を含む関係機関からは、それを応援して頂ける。大学は学校教育が持っていない知見を持っており、人的、物的、知的に優れた面から、小中学校教育の現場を応援して頂けることはとてもうれしいし、子どもたちのために良いことと思っている。
- ・お互いに福知山の未来を背負う子どもたちを育てあう喜び、お互いの立場が育ち合う喜びを、WIN-WIN の関係で持っていければと思う。
- ・大学にはぜひ、もっともっと地域に出ただけければと思う。自動車などで走っていると、10人程度のグループが福知山を探求しながら歩いておられる姿を見るし、地方紙でよく報道されているのを見て頑張っているなどと思う。地方紙には、「自分の故郷はこんな良いところがあるが、福知山もこんな良いところがあり、頑張っていると」といった学生の記事を読むことも多い。そうした地域に根差した活動をしてあげることがうれしい。
 - ・一番うれしいのは、来年度から情報学部ができること。これは強みである。これからはAIを活用できる人間を育てていかなければならない。そのためにはプログラミング教育は重要であり、プログラミング的思考力を育成することも大切。そういった面を、先端知識を持った先生方から福知山の教育の中に注入していただくのは良いことである。
- ・最近残念に思うのは、市の人口数値が減っていることについてである。福知山はどうなっていくのかな、寂しいな、と思うが、一方で福知山以北と比較すると人口減少率が低いともお聞きしており、これは様々な施策によることと思う。子ども政策室等による子

どもを育てやすいまちづくりの施策などに加え、「知の拠点」である福知山公立大学と幼稚園、小、中学校が連携して活動していけば、更に人口減少率が低くなるのではと期待し、うれしく思っている。具体的な方策については、それぞれ立場で今後検討していければと思う。

大槻委員

- ・公立大学生が街中や色々なイベントで活躍しているのを見る。また、学生が吹風舎で地域の子もたちと勉強したり、中学校での補習学習に来るなど、子どもたちが歳の近い人に教えてもらうことで、今までこれまで触れられなかった未来の自分の姿を見ることができ、公立大学ができて良かったと実感している。
- ・大学の先生の講義が体験できるということも大事だが、実際に子どもたちが開かれた大学で体験をすることは非常によいと思うので、中学生が高校のオープンキャンパスに行くように、公立大学でもオープンキャンパスの告知を広めていただき、小学生、中学生はもちろん、子どものいないご家族の方などにも幅広く大学を知って頂き、大学という学びの場はこういうところである、ということをもっと広く知ってもらえればと思う。
- ・地元の子どもが福知山の大学で学ぶことも大事であるし、全国から学生が来て福知山を盛り上げ、自分の地域で活かすことも大事と思う。
- ・グローバルな視点で学んだことを、国際社会で活かすだけではなく、自分の地域に持ち帰るグローカルの考えを、福知山の子もたちにも持ってほしいと思う。
- ・子どもたちがどんどん、学生の皆様と触れ合えれば。

倉橋委員

- ・教育のまち福知山のイメージは人それぞれであるが、私が教育のまち福知山として自負できると考えているのは、福知山市内で幼保小中高大と完結する点である。約8万人規模の都市では中々ないと考えるし、中学校でも私立、府立、市立があり、競争、切磋琢磨がある。福知山の子もたちは教育環境に恵まれており、それが教育のまち福知山であると考えている。福知山は子どもたちの選択の幅をひろげ、自分の夢や希望を実現し、力をつける可能性が非常に大きい。
- ・社会教育や生涯学習という視点においても意欲は高いと思うし、きちんとした活動が行われることで市民の豊かな生活に近づいていると思う。これが教育のまち福知山なのではないかと私は思っている。
- ・一方で、数的には社会教育は充実しているものの、教育環境の質的な面ではまだまだ課題が無い訳ではないので、これを一層充実させるため、質の向上が必要。
- ・公立大学ができたことで福知山市が全国区になり、認知度も高まった。その事ゆえに新たな発展を考える土台は広まった。教育のまち福知山の充実発展にもつながる可能性も広まった。

- ・しかし、公立大学への市民の認識はまだまだこれからではないかと考えている。子どもたちが入りたい、保護者が入学させたい、そういう点ではまだ課題が大きいのではと感じる。
- ・小中学校でのふるさと学習は体系的に一所懸命に取り組んでいる。ふるさとを愛する気持ち、なんとかしたいという気持ちは育ってきていると思うが、現実、高等学校卒業後はふるさとを離れているのが実態と思う。
- ・そういう実態の中で、本市の子どもたちが夢や希望を持っていきいきと育ち、福知山を愛する心を育て、福知山公立大学を目指す人が増え、地域との連携進展から大学への信頼が高まる、そういった好循環を期待したい。
- ・先ほどの大学政策課からの提言や委員の皆様の提言を活かしきるものになれば。また、良いことだからどんどんやればという部分はあるが、どんどん提案、計画をしていただけ、大学、学校現場での取捨選択を好循環させれば、課題解決につながり、福知山の教育がさらに充実したものなるのではないかと思う。
- ・今後とも大学、小中の求めるものがうまく機能すればと考える。

市長発言

- ・教育のまち福知山と言っても、学校教育、社会教育、それぞれ持つておられるイメージは市民の皆様お一人ずつ違うと思う。
- ・総合教育会議の場、あるいは大学という存在を通じで、改めて教育のまち福知山をどうさらに発展させるかと考えることが必要ということで、このようなテーマを設定した。
- ・教育のまち福知山の厳密な定義をどこまでできるかというのは難しいが、目指す方向のすり合わせをしていく必要があるとの意見を頂けた。また、大学側の思う連携と、小中学校の思われる連携のイメージが違うかもしれず、お互い WIN-WIN になるような形にならなければならないとの意見も頂いた。
- ・大学からの提案もあったが、目指すべき方向性は考えていかなければならない。具体的にこうしたことをやっていこうという中で、共通の方向性に向かい、進めていくことが必要と考える。
- ・市長部局と教育委員会がしっかり意思疎通しながら役割を果たしていきたいと思うし、大学の思いもそこに入ってくるので、まずこうしたことを進めていくことが重要ということをご理解いただいた上で、これから一緒に、具体的に形作っていきたい。
- ・今回情報学部ができることも含め、子どもたちの未来を考えるという中でシステム教育の話もしたが、平成を振り返れば元年にアメリカで光ネットワークが初めてつながり、インターネット環境が基盤としてスタートした時代であった。今やインターネットは社会インフラの一部となり、一方でPCを当たり前持っている時代になった。近年ではさらにスマートフォンの台数のほうが多い。
- ・AI、VR、5Gといった話が最近飛び交っているように、非常に高度情報化が凄まじい勢

いで進んだ時代が平成であり、これがさらに進む時代を迎えようとしている。

- もうひとつはグローバル化の話もある。インターネットが発達し、国境がある中で国境がないというような時代になっていく。
- こうした時代に生きていくためには、いかに大学が持っている知見を小中学校に取り入れていくかが大事である。
- 現在460名ほど公立大学生がいる中で、地域との関わりを持とうという学生が多くいる。これは教育カリキュラムの中で地域実践教育として実施していることだが、カリキュラムがなくても自分が地域に行きたいという学生もいる。そうした大学生の姿を身近で子どもたちに見てもらえるというのは、非常に大きなことである。
- オープンキャンパスなどで子どもたちが自由に出かけていき、大学はこんなところなのかと保護者の方も含めて見ていただけるという資源が福知山にあるということも活かしていきたい。
- これからの方向性をしっかり共有しながら、大学がすべきことをする中で、幼稚園、小中学校などとの連携により大学自体もいいものを頂ける、幼稚園、小中学校もいいものが得られるという状態にしていきたい。
- 先ほどの具体的な提案を含めて、教育委員会や皆様と話し合いをしながら進めさせていただければ大変ありがたいと思う。教育のまち福知山がさらに発展するよう頑張りたい。

○第2テーマ:持続可能な開発のための教育(ESD)の理念について

- それではこれよりは、二つ目のテーマである持続可能な開発のための教育、ESDの理念についてお話させていただく。
- ESDの取組みはSDGs以前からあった。元々SDGsの前の時代はMDGsという取組みがあったが、これは取組む主体が公メインであり、開発途上国で頑張るというような内容であった。当時の目標自体は一定達成しており、この時代にESDの考えが出てきた。
- その中で、2015年国連サミットで新たにSDGsが採択された。ここからは公だけでなく、民間企業などのプライベートセクター、NPOのようなソーシャルセクターが参加し、さらに開発途上国だけでなく先進国も含めて世界中で取組もうという話に変わっていった。
- 世界中を見ると、戦争、貧困、気候変動など様々な課題要素があり、今の時代の私たちがそれぞれの立場で、持続可能な社会を作っていくこと求められているということから、2030年の開発目標を立てた。
- 17の目標はあらゆる分野が網羅されているが、教育に関わっては4つ目のゴールである「みんなに質の高い教育を」が当てはまる。SDGsを達成するためにはそうした教育をやっていかなければならないし、これを意識しながら子どもたちが学んでいくという

意味で、持続可能な開発のための教育、ESD の取組みが様々な形で始まっている。

- 一方で、現在の取組が ESD という言葉を使ったものであるかどうかは別問題と思う。世界の状況を知り、環境問題、社会問題をしっかり子どもたちが学んだ上で思いを育んでいくことが重要であり、「持続可能な開発のための教育」という言葉を使わずにやっているのが普通であると思う。
- 福知山市では今年から SDG s を意識しながら政策の中に落とし込んでいこうとしており、再生可能エネルギー普及や省エネ対策、温暖化に関わってはクールチョイス宣言なども行っている。
- 子どもたちに関わっては、過去の戦争を学び、現在世界中で飢餓、貧困により、今自分が生きている瞬間にも亡くなっている子どもたちがいることを理解してもらうために、平和・人権の輪つながり広がり事業の中で子どもたちを対象として子どもたちを対象に世界の内戦や貧困問題等について学習する事業を今年度から実施している。子どもたちに世界の現状を知ってもらう中で、SDG s のきっかけづくりになればと思っている。
- 社会、経済、環境が大きく変化していく中で、みんながそれを意識しながら様々な活動をしていかなければならないという時代になったことは間違いない。
- SDG s に取組む担い手に民間企業が含まれたという話の中で言えば、今社会や経済、環境を意識しない企業への投資額は、おそらく将来大幅に減っていく。こうしたことを意識した投資を「ESG 投資」と呼ぶが、これの世界中の投資額は 3 4 1 8 兆円ほどあり、かなり大きなボリュームを占めている。
- こうした民間意識の変化がある中で、子どもたちが環境、社会に対する意識を、ESD という言葉は使わなくとも、教育の中で取り入れていくことが大事であろうと思っている。
- 理念的な話をさせていただいたが、委員の皆さまのお考えをお聞かせいただければと思う。

和田委員

- ESD、SDG s の目標達成に向けては、課題別の系統化はできていないものの、学校教育の全ての取組みの中で行われていると考えている。SDG s の取組みは決して新しいものではなく、既に行っている行政施策の分野別整理、成果課題の整理を行い、不十分さを見つけだして新しく取組んでいくという取組ではないかと理解している。
- 2030年までのまちづくり計画を策定し、本市のあるべき姿を描いて短期目標を設定し、どう具体的に取組むかということが、SDG s ではないかと思う。
- 目標4の「質の高い教育をみんなに」という点を見れば、世界的に十分に読み書きのできない15歳以上の人数は7億5000万人と言われ、その3分の2が女性とも言われている。また、就学年齢に達しながら小学校に通えていない子どもたちが5000万人いると言われている。先進国の日本、あるいは福知山においてこのような状況はないとしても、相対的貧困、不登校、ひきこもりにより教育機会を奪われている子どもたちが

いる。また、経済的理由によって希望の高等教育を受けられない子どもがいると聞いている。職を失った時、再び学びなおしの機会を得ることができない社会人もいる。こうした状況が福知山にあるとすれば、SDGs 第4目標の理念が十分に達成できていないのであろうと認識している。

- ・2030年には労働人口の49%が人口知能やロボットに代替されるという試算がSDGsにおいても成されている。変わりゆく社会の中で、既に体系化された知識やスキルを伝達するだけでなく、プログラミング教育やアクティブラーニングの学習方法を通して、学び方を学ぶ事が必要だと考える。地球全体の事を考えた意識を育み、知識を伝え行動していく人間育成が、今福知山市が成すべき取組みではないかと思う。
- ・教育は第4目標に限定されず、全ての目標達成を下支えする重要な役割を担っていると考える。これからの福知山の子どもたちがSDGsの目標を達成するためには、教育が持つ意味は大きい。

塩見委員

- ・ESDの理念は、地球規模の課題に対して一人ひとりが自分のこととして捉え、その解決に向けて自分から行動を起こす力を身に着けることと思っている。
- ・地球規模の課題としては17の目標に集約されているが、学校教育の現場においては、生活科、総合的な学習の時間という教育課程の中で、発達の段階に応じて身近な福祉問題、人権問題、環境問題、様々な領域に関して教育活動に組み込まれ実施している。
- ・このように、これまでから現場では発達段階において幼稚園、小学校、中学校で実施してきている。SDGsとなると、教育活動と相互的に福知山市がその一端を担っていければいいなと思っている。

大橋市長

- ・塩見委員は、八名川小学校のESDカレンダーを見られたことがありますか。

塩見委員

- ・インターネットで見たことはある。
- ・正直に言えば、ユネスコスクールは教育現場では十分数があるとは言えない。
- ・ただ、ユネスコスクールの指定がなくても、教育課程の中で全国が学習指導要領に則ってESDに関わる教育が行われている。

大橋市長

- ・おそらくSDGs自体も、それぞれの自治体が従前から取り組んできた事業がSDGsにつながるものとして既にたくさんやってきた。
- ・ただ、目標の立て方が変わってくる場合はある。例えば再生可能エネルギーであれば、

みんな再エネを増やそうという事業はこれまでから考えてきているが、民間企業で言えば、RE100と呼ばれる、2050年ごろまでには再生可能エネルギー100%で事業運営をすることを宣言する仕組みがある。そういう部分まで物事をSDGsとの関係で高めていくかどうかというのは、考え方で変わろうかと思う。

- ベースとしてはこれまでからそれぞれがやっている。これを開発目標として取りまとめた形をとって、SDGsという名称を付けている部分はある。
- 経済、社会、環境をみんなでしっかり考えないと、将来持続可能性がなくなってしまうという共通認識を持つという意味では、言葉の価値があろうかと思う。ESDは十分、学校で実際にやっているということであり、その通りだと考える。SDGsとの関連の中で、他の小学校の取組みなどでESDとしてやるのに良いアイデアなどを教えて頂ければという思いで、八名川小学校のことをお聞きした次第である。

塩見委員

- 学校教育の現場でESDを意識して教育活動に当たっているかということ、ベースとしては意識しているが、薄れるところも無きにしも非ずなので、福知山市としてSDGsを掲げて頂き、進めておられる施策と学校の教育活動がつながれば、教育テーマがはっきりするので、教育現場では励みになると思う。

大槻委員

- 保護者レベルにとっては、ESD、SDGsはなじみのないものではある。保護者としては、目の前の子どもが毎日楽しく学力をつけて、安全安心で元気に過ごしてもらえることが願いである。
- SDGsの目標4の中に、全ての若者、大多数の成人が、読み書き能力及び基本的な計算能力を身に付けられる、とあるように、当たり前基礎、基本を義務教育が終わるまでに身に付け、その上で情報教育などの幅広い知識を学んで欲しいと思っている。
- 実際の現場でも、初級計算ができずに中学校に上がっていく子どもがいる。来年から小学校の英語教育がスタートするが、中学校で初めて英語を学習する子どもでも小学校段階で国語、算数などをこつこつ積み上げる力がなければ英語の力は到底身につかないと思う。
- ユネスコの書き損じハガキ回収の取組みなども、なぜ集めていて、どのように使われているかを子どもたちが意識することが大切である。平和人権学習で、何時間もかけて水汲みしている子どもの話や、ゴミの山でお金になるものを探している子どもの話などを通じて、子どもだけでなく大人、そして地域全体がそういった問題を意識して過ごせるようになればと思う。
- SDGsの取組みを通して福知山が発展していければ。

大橋市長

- ・子どもたちが今暮らしている同じ時間で、全く違う環境に生きている子どもたちがいるということは中々わからない。
- ・学校に通えない子どもが6千万人ほどいる中で、目標の4だけではなくジェンダーの平等、女性のエンパワーメントの面から言っても、開発途上国で3分の1ほどは女性が差別を受け、男性とは違う初等教育しか受けられない状況がある。今自分が暮らしている世界はどういう状況なのか、知っておくことに意味があると思う。

倉橋委員

- ・八名川小学校のESDカレンダーについて見ると、教育内容は指導要領の項目を他と同様に教えているが、結果や報告の成果に違いがある。学校としての捉える視点や教育方法を工夫して変えられているのだろうと思う。
- ・SDGsを意識することで、教育の方法も変わる可能性があると感じた。そうしたことが、うまく機能すればと思う。

大橋市長

- ・色々なご意見を頂き、感謝申し上げます。
- ・SDGsの取り組み自体はこれまでやってきたことではあるが、現状を再確認し、持続可能な社会をつくっていかうという思いで、方向性を定め、やることを点検しつつ、進めていければと思う。
- ・第1のテーマについても、方向性も含めてお話をしつつ、具体的なものに結び付けていければと思う。
- ・予定の議事は以上である。引き続き市長部局と教育委員会それぞれが連携を密にさせていただき、教育のまち福知山を発展させて参りたいと思うので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

教育長より挨拶

- ・これまでのお話を聞いた上で数点述べさせていただきます。
- ・1点目として、教育のまち福知山の理解に若干の差異があったという件について。
- ・教育のまち福知山はそもそも、「教育を尊ぶ気風のあるまち」とするものであった。
- ・昭和50年代、児童生徒が増え、問題行動も増え、酷い生徒指導の実態があった。
- ・これを何とかしなければならぬが、学校だけでは難しいということから、家庭や地域社会に踏み込んだ。学校教員が地域に出て、懇談会、集会を開いて依頼、報告をする場を全市内に広げていった。これをこだま教育と呼び、また各地域の掲示板を書く「掲示教育」を広めるなど、地域、保護者に呼びかけていった。
- ・全市が人を育てる、教育について考え大事にする、そういった土壌があるということ

教育のまち福知山とした。これが興りである。

- ・以降、様々な問題、施策、授業等を経て現在に至る。今、教育のまち福知山を振り返って、どう考え、どう成長し、どう発展しているのかが今日の協議の中身だったと思うが、今後もそういう方向づけが必要であると考え。
- ・教育委員会としては、改革プログラムが令和2年度末で終わるが、教育内容のシームレス、学校の適正規模配置、統廃合、複式学級解消という目標が完結する予定である。機会としては良い時期であり、あと2年弱で次の準備を整えなければならないということから、事務局に企画担当課長を置いた。
- ・2点目として大学と連携についてである。
- ・定められた年間の授業日数、授業時間数がある中で、良い話ではあるものの具体的にどう処理していくか、正直なところ不安がある。今後、現実的にどうするのかという具体的な連携の方法を、よくよく考えていかなければならない。
- ・また、義務教育から大学に至るまでに高等学校の3年間があり、中学校から大学へ順序を飛び越えて進むという訳には中々いかないで、その点注意が必要である。
- ・現在は地元出身者よりも他府県出身者が多いように感じている。進路指導という面よりも、キャリア教育として自分の将来設計、職業選択と合わせて指導しなければ、地域の大学としてふさわしいのかという観点もあろうかと思う。
- ・3点目はSDGsについてである。
- ・各学校には1年間の教育計画があり、各領域、教科の中で環境、人権、平和など、SDGsやESDの理念を上げている。福知山市の教育重点にも、ESDの推進を掲げている。
- ・ただ、これを現場が本当に意識しているかは不安に思う。これからの子どもたちがつけなければならないのは、予測できない変化に受身で対処するのではなく、前向きに受け止め、主体的に関わる力である。日本国内、全世界で起きている様々な諸課題に対して、子どもたちがいかに気づくか、そして学校がいかに意識を深めさせるかにかかっている。
- ・4点目は、今年度の市政方針についてである。
- ・大橋市長が就任された際の方針と比べ、教育に関わる内容が大きく増え、大変ありがたいと思っている。教育のまち福知山が市政方針の中に表れており、非常にうれしい。
- ・今後もこの実現に向けて、教育内容の充実をお世話になればと思う。
- ・最後に、大きな交通事故のニュースが立て続けに報道されており、子どもの生活環境は危険に満ちていると感じる。
- ・学校現場に確認をしてみると、すぐに登下校指導、安全点検等対応しているとのことであった。しかし、本当にこれですべての子どもが守られるかと言えば、非常に難しい。
- ・教育委員会、教育現場、家庭地域社会を挙げて、全力で子どもを見守らなければならない。ぜひ市長部局においても、子どもを守る取組についてお考えいただきたい。

以上